

神と御傳へあり、其年十月二十一日、麥の植付も全く終りたる時、神より『麥の植付も濟んで安心致したであらう』といふ神言あり。是れ家事も一段落となるべき此の時を待つて、神は教祖を愈々道の人として立たしめらるゝ神意であつた。教祖は神命のまゝに、更に改まつて五色の幣を切つて拜禮し、麥蒔の御禮を申上げられると、直ちに神傳下る。

金子大明神、此の幣切り堺に肥灰差止めるから、其の分に承知して呉れ。外家業を致し農に出て、人が願ひ出れば呼びに來戻り、願をすませ又農へ出、又呼びに來、農業する暇もなし、來た人も待ち、兩方の差支に相成る、なんと

家業を止めて呉れぬか。其方四十二歳の年には、醫師も手を放し心配し、神佛に願ひ、おかげで全快致し、其時死んだと思つて、慾を放れて神を助けて呉れ。家内も後家になつたと思つて呉れ、後家よりは優し、ものもいはれ相談もなり、子供連れてぼつゝ農業し居つて呉れ。此方のやうに實意丁寧に神信心致して居る氏子が、世間になんぼうも難儀して居る、取次助けてやつて呉れ。神も助かり氏子も立ち行き、氏子あつての神、神あつての氏子、繁昌致し、末々親に掛り子に掛り、あいよかけよて立ち行く。最も懇に深き神意を寄託された。此を立教の神宣と稱し、